

東京芸術座 公演

未来

原作：重松清

「未来」(『カカシの夏休み』所収)文春文庫刊

脚色・演出：北原章彦



スタッフ

美術／幡野 寛

音楽／洪 栄龍

照明／諸橋忠司

効果／馬上真勝

衣裳／山田靖子

表紙絵・デザイン／オザワミカ

企画協力＝文藝春秋

登場人物

笹岡みゆき (19歳)

笹岡政人 (弟)

笹岡慎二 (父)

笹岡雅子 (母)

増岡光太 (新聞記者)

武田丈志 (医師)

長谷川正樹 (みゆきの同級生)

中山彰 (みゆきの同級生)

堀川奈緒 (みゆきの同級生)

前田リポーター

浅野記者

佐藤修治 (働哭の会・事務局長)

手塚新造 (働哭の会)

手塚恵美子 (働哭の会)

坂本直人 (高校教諭)

あらすじ

わたしの趣味はボランティアだ

わたしはいい人になりたい

笑えなくてもいいから

誰かのために泣いてあげられる人になりたい

高2の夏、わたしはたいせつなものをなくしてしまった

「日記か手紙を書いてみませんか？」

大学病院のお医者さんからのアドバイス

「ほんとうの気持ちを一言でもいいから書いてみませんか？」

わたしは、日付も宛名もない文章を書いてみることにした

あの日から3年の月日が流れていた

昨晚

弟の同級生が自らのちを絶った

弟の名前が書かれた遺書をのこして

原作者：重松清氏インタビュー

重松 清



1963年 岡山県生まれ 早稲田大学教育学部卒 出版社勤務をへて著述業に
1999年『ナイフ』で第14回坪田謙治文学賞受賞
1999年『エイジ』で第12回山本周五郎賞受賞
2001年『ビタミンF』で第124回直木賞受賞
2010年『十字架』で第44回吉川英治文学賞受賞
2014年『ゼツメツ少年』で第68回毎日出版文化賞受賞
その他の主な著書に『流星ワゴン』『とんび』『その日のまえに』など
2016年から早稲田大学文化構想学部教授（任期付き）

— いじめを題材とした小説を書かれたきっかけを教えてください

(重松) 子ども時代は転校を繰り返していたから、新しい学校に入ると人間関係に敏感にならざるを得なかった。そこで見えたものがいじめの原風景かな。それとフリーライター時代、ニュータウンの塾で団塊ジュニアの子どもたちを教えていたんだけど、子どもたちのリアルな生活に接しているといじめを含む人間関係が見えてくる。一番難しい友だち関係としていじめを捉えたことだね。

— 『未来』ではいじめの当事者ではなく、傍観者を主人公として描かれています

(重松) いじめる側ではなく、いじめられる側でもないけれど、傍観者は無関係ではあり得ないよと。複雑な構図、人間関係を描きたかった。

— 『未来』というタイトルに込められた思いを教えてください

(重松) 単純にいじめにフィードバックするのであれば『未来』というタイトルは付けていない。この小説を『文學界』に発表したときのタイトルは『あなたが生きなかった未来』だった。単行本にするとき『未来』にしたんだけど、それはいじめ云々ではなく“心ならずも生きられなかった人の未来が、僕たちが生きている今日なんだよ”っていうことを言いたかった。それはいじめで命を絶った少年の未来であり、昨日病気で亡くなった人の未来でもあるわけ。作家としては、一回り大きなね……死んでしまった人の未来を生きているんだという意識を持ちたいねって。助けられなかった友だち、戦争で亡くなったり、原爆で亡くなった人たち、僕たちが見殺しにしたとは言わないけれど、傍観していて助けられなかった友だちの未来を生きているんだよって思いからだね。今日を踏ん張るときに必要なものは希望だと思うのね、明日に希望がないということは未来も否定されてしまう。今日酷いことがあったから死んじゃうってこと以上に、明日もまた酷いことがあるだろうと思うから死んじゃうんじゃないかな。未来を否定されたときに命を絶つのもかもしれないと、取材したり子どもたちに接することで感じた。いじめに限らず、子どもたちから未来を、希望を奪っちゃいけないと思う。子どもたちは閉ざされた教室の中でね、明日もいいことがないって思うことがほんとにシンドイことだと思うよ。

— 今の時代のいじめと、ご自身の子ども時代との違いを感じますか？

(重松) 古き良き時代とか、昔のほうがおおらかだったなんて少しも思わない。昔は子どもたちのいじめ以前にハンディキャップを抱えている人への意識や母子家庭への意識だったり、社会的弱者へのいじめの構図があったから、子どもたちのいじめが目立たなかっただけじゃないかな。

— 以前「何かを残したい」と書かれている記事を拝読しました、その思いは東日本大震災を経験して変わりましたか？

(重松) 『未来』を執筆した20年前は、自分の子どもたちがいじめで命を奪われたり未来を信じられなくなるような苦しみに会わせたくない切実な問題だったけど、何が言いたかったかと言えば死んだ人たちの生きられなかった未来を生きているんだよということと言いたかったわけで、それは3.11を取材してきて一層強くなったね。一瞬のうちに2万人以上の命が奪われた、その人たちの思いを背負って2018年生きているんだという思いがね。

— 生きているって幸せだと思える瞬間を教えてください

(重松) 明日起きたら、何をやろうと思えることが幸せだと思う。飯が美味しく食べられてぐっすり眠れることが幸せだと思うし、僕だったら小説を書こうと思えることが幸せだと思う。明日を楽しみにおやすみなさいと言えることが幸せなんじゃないかと思うね。若い人には「自分の明日を信じて生きて行けることは幸せなことなんだよ」と伝えたいし、そこから逆算して言えることは、いじめの問題があったり、震災の記憶があったり、戦争が未来を強引に断ち切り憎しみの連鎖がお互いの未来を断ち切ったということだと思う。未来には希望があってほしいよ、そういう世の中であってほしい。僕が『未来』を最初に書こうと思った根っこにあったのもそこだし、それはいじめの問題を超えたもので、20年経っても自分の根っこにあるものなんですよね。

— ありがとうございます

いじめ問題に向き合って

教育評論家 臨床教育研究所「虹」所長
法政大学特任教授

尾木 直樹



『子育てと教育は愛とロマン』『学校は安心と失敗と成長の砦』が信条。
滋賀県生まれ。早稲田大学卒業後、私立海城高校、東京都立中学校教師として、22年間子どもを主役とした創造的な教育を展開、その後大学教員に転身して22年、合計44年間教壇に立つ。それらの成果は200冊を超える著書（監修含む）、DVD・ビデオソフト、映画類にまとめられている。
「尾木ママ」としてテレビや講演会活動などで広く親しまれている。

【中・高生の皆さんへ】

もしかして、あなたは今、いじめに悩んでいるかもしれないね。いじめられてる？ まさか、だれかをいじめている？ それとも、友だちへのいじめを見ているだけで、止められなくて悩んでいる——？

現代のいじめは、「いつでも・どこの学級でも・どんな理由で起きてもおかしくない」。どの子がターゲットになっても不思議ではないのが特徴なんだ。小学4年から中学3年までの6年間に、いじめの被害者、加害者になった経験がある児童生徒の割合は、2015年度はいずれも約90%（「いじめ追跡調査2013—2015」国立教育政策研究所調査）。そもそも、いじめは特定の人だけの問題ではない。だから、我慢したり、自分一人で乗り越えようとしなくていいんだよ。

いじめは、解決することが一番大切なんだ。まずは学校の先生やお父さん、お母さんなど信頼できる大人に話してほしい。いじめがひどくなる心配や、自分がいじめのターゲットになるんじゃないかという不安も大きいかもしれないね。でも、そんな不安も含めて、まずは大人に話してみようよ。解決はそこからスタートするんじゃないかな。

そして、いじめは、加害者がいるから始まる。やっている方は「遊び」や「ふざけ」・「いじり」だと思っても、相手が嫌な思いを抱いたら、それは「いじめ」なんだよ。

では、人間はなぜ、いじめをするのか。いじめの心理を考えることも大事だね。いじめの最大の原因は、やはり「ストレス」。自分が辛い思いをしていると、大人だって、いじめとまではいかななくても、いやがらせをしたくなる気持ちになることもある。ストレスが少ない学校や家庭、社会をどうつくっていくかは、君たちだけでなく、大人も含めた現代の社会全体の大きな課題だね。

さて、学校ではどんな取り組みができるだろうか。子どもが主役になった楽しい学校づくりは、足立区立辰沼小学校の「辰沼キッズレスキュー」活動など、全国に優れた先駆的実践例があるよ。子ども主体で、先生方や学校の協力、保護者や地域のサポートがあれば、正義が通り、いじめが起きてもすぐに解決できる学校になるはず。

いじめ問題は、一つひとつ乗り越えていく中で、人の心の痛みがわかる感性が磨かれ、解決する自分たちに自信を持つことができ、友達への信頼感を深めることもできる。それが人間の成長にもつながるのです。

いじめなんかに負けないで。一緒に楽しい学級・学校を創っていきましょう！

【学校関係者、保護者の皆さんへ】

近年、日本におけるいじめ問題への社会の対応は、目覚ましく進んでいます。大津中2いじめ自死事件が契機となり、2013年に「いじめ防止対策推進法」が成立・施行され、文科省のこれ以上ないほどきめ細かいガイドラインも整備されました。法施行後は、第三者委員会を立ち上げ、被害者や家族の気持ちに寄り添った解決をめざす事例も増えてきました。一方で、依然として教育委員会などの行政や校長など学校関係者による隠蔽、加害側が弁護士を雇うなどしながら加害行為を正当化したり、責任逃れの言動をとる等、被害者や家族がさらに深く傷つけられる事例が後を絶ちません。法に実効性を持たせていく必要を感じます。

そんな折に、正面からいじめに対峙する作品『未来』が東京芸術座で上演されると知り、私は希望と期待で胸がいっぱいです。

演劇は私たちの感情にダイレクトに訴えかけてくれます。クラスや学校で、いじめを題材にした劇を通していじめ問題を深く考え直すことは、スマホなどネットを通したバーチャルな人間関係に慣れた現代の子どもたちに、いじめとは命の問題であり、みんなで向き合い取り組んでいくべき大切な課題なのだ気づかせてくれるはずです。伝統ある専門劇団の舞台を鑑賞しながら、いじめのない明るく安心でき、誰もが伸びる学校を子どもたちと共に創ってほしいと願っています。

長谷川くん。 これが、あなたの生きなかった



— 三年前、それまで一度も話したことのない
同級生の長谷川くんが電話をかけてきた。

クラスメイトの自殺に巻き込まれたみゆき

「おれ死んじゃうからさ、笹岡、
おまえはずっと生きろよな」



— あのときから、わたしは笑うこともできないし、泣くこともできない。

弟の同級生の赤堀くんが自ら命を絶った 見つかった遺書には弟・政人の名前だけが書いてあった



過熱する報道 理由もわからないまま加害者になってしまう家族

十九年と二百二十二日めの未来。

あの時以来 3年振りに訪れた高校

— 忘れてない。
わたしあの人のことを一日だって忘れたことない。

「もうすぐ三年になるだろう。先生はさあ、
けっこう忘れてるんだ 長谷川のこと」
「ひょっとしたら長谷川、お前にずっと
覚えていてもらいたくて電話したのかもな」



政人の名前だけが遺書に書かれていた理由が明らかになる



「赤堀くん、遺書を全部で三十二通
書いてたんですよ。クラス全員分の」

— これで最後のお別れなんだから、
行かなきゃ、ほんとだめなんだよ。



赤堀くんとの最後の別れに向かう二人

— 政人はずっとあなたのことを忘れない。

30日振りに訪れた大学病院

— わたしは、いい人になりたい。
なれなくてもいいから、
なりたいた願っていたい。

